
殺人鬼の日常。

小石 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の日常。

【Nコード】

N29450

【作者名】

小石 汐

【あらすじ】

殺人鬼と呼ばれた男、南雲 冬夜は銃で撃たれ、一度は死んだはずだった。致命傷だったはずだ、と冬夜は考え、走馬灯の中にいるのだ、と結論を出すも、違和感が拭えなかった。そして違和感は、やがて現実となり、歴史は大きく変わってゆく。

そこで冬夜はようやく理解する この世界も本物だ、と。

*2011/12/2

ひょうりばーす 代理者の慟哭、と来て、二回目の改稿中です。

真に勝手に申し訳ございませんが、引き続きお付き合いいただければ幸いです。

殺人鬼の最後

立ち並ぶビルの合間、細い路地を照らすのは、大通りから差し込む僅かな光だけだった。そのせいも、奥に進めば進むほど、薄暗くなつてゆく。少し先を見通せないほどではないが、路地の奥へと続く闇は恐れを抱くには充分なほどに濃かった。またカビ臭さと、何かの腐つたような臭いが混ざり、鼻をついた。よく見ると、路地には破けたビニール袋が散乱していた。これが臭いの原因だろう。

恐らく、誰もが踏み込むことを躊躇するだろう。しかし、そんな所に一人の男が現れた。動きは鈍く、ビルの壁に手をつきながらも男は進む。時折、水が滴るような音が細い路地に響くも、大通りから流れ込む喧騒に吞まれていった。

男の名は南雲なぐも 冬夜ふゆやと言ひ、全国指名手配犯の中でも、ダントツの知名度を誇る。無差別に殺してきた人の数は一体どれほどになったのか。もはや本人ですら把握できていない。血の臭いが全身に染み付くほど、屍の山を築いてきた。そのためか、路地に入った当初、充満する悪臭に顔をしかめた。自分の臭いと違うため、余計に鼻についたのだ。しかし、それにもすぐ慣れる。どちらにせよ、後戻りはできない。今、大通りに出たら、どうなるかは簡単に想像がつく。

捕まつて、退屈な時を過ごして、最終的に死刑にされるぐらいなら、自らで命を絶つたほうがマシだろうか。冬夜は苦い笑みを漏らしながら、腰に差しているナイフに思いを馳せた。日本の裁判制度は長すぎる。もっとスケジュールを詰めて、さつと執行してほしいものだ、と誰もいない路地に呟いた。

冬夜は一度、後ろを振り返る。幾度か角を曲がったので、大通りからの光も届かない。そんな中、目を凝らす。闇に慣れつつあった目に人影は映らなかつた。とりあえず、追っ手はいないようだ。しかし、どこからともなく聞こえてくる怒声に、身を強張らせた。ま

だ近い、と冬夜は更に奥へと足を進める。しかし、そこで気づく。自らの足元に滴る確かな痕跡に。

見つかるのも時間の問題だろう。冬夜は半分諦めながら、壁にもたれかかった。しかし、膝に力が入らず、ずるずると壁に背を擦りながら崩れ落ちる。そして残してきた痕跡に目をやった。自分の腹部から流れ落ちた血液を指でなぞり、苦笑を漏らした。

腹部には二つの穴があった。銃で撃たれたのだ。当初は焼けるような痛みが続いていたが、それも鈍くなり、痛む範囲が広がったように感じる。止血しようと手で押さえて来たものの、一向に止まる気配は無い。冬夜は諦めて、傷口から手を離した。

刹那、薄暗い路地に小さな光が躍る。来たか、と冬夜は身構えるも、もはや身体が言うことを聞かなかつた。血を失いすぎたのだ。恐らく追っ手が持つ懐中電灯か何かの光だろう。でなければ何度も角を曲がっているのに、こんなところまで光が届くはずが無いのだ。詰みか、と小さく零して、冬夜は壁に身を預け、目を瞑った。

そのまま眠りにつけそうな心地に陥る。もう、そのまま目が覚めなければいいのに、と冬夜は思った。むしろ、こんなことになるなら、最初から無駄な抵抗などしなければ良かった。腹部に二発、銃弾を受けてしまった時点で諦めれば良かった。無駄な努力だった、と冬夜は締めくくる。

いつしか臭いや音が消えていた。元々、薄暗い路地であったが、更に暗くなつてゆく。そして意識がまどろんでいった。こんな心地で死ねるだけマシなのかもしれない、と冬夜は僅かに安堵の息を漏らした。

ふと目が痛んだ。暗くなりつつあった視界に、光が戻る。しかし、輪郭ははつきりとしらない。冬夜の目を刺激するただけに、鋭い光が向けられたかのようにであった。その刺激に感じるかのように、聴覚も少しだけ戻る。面倒くさいと思いつつも、血に濡れた手をかざし、光を遮る。何かか聞こえた。ただ反応を示す余裕など無かつた。かざした手すら、再び真っ赤な海に落ちて、血が跳ねた。

刹那、腹部に衝撃が走る。息が詰まり、冬夜は必死に酸素を求めた。これから死ぬと言つのに、酸素を求めるといふ行為が何とも矛盾しているように感じた。しかし、苦しみたくはない、と自身を納得させた。

「おい、生きてるか」

今度は声を聞き取れた。透き通るような声をはつきりと。その声の方に目をやると、紺の制服に身を包んだ女性が立っていた。見下すような冷たい眼差しが冬夜に注がれる。まあそれぐらいのことをやってきたしな、と冬夜は苦笑を漏らした。

「笑うな、ゲス」

女はコンパクトなモーションで再び蹴りを放つ。防ぐ間も無かった。固い爪先が冬夜のみぞおちを的確に捉え、再び息が詰まり、吐き気と息苦しさに苛まれる。

それにしても撃つたところを蹴るか、と冬夜は苦い笑みを漏らした。それも仕方が無いことだ、と認識した上で。あれだけ人を殺してきたのだから、殺されそうになった際に文句を漏らすつもりなど無かった。むしろ、さっさと殺せ、と冬夜は呟いた。

「そう簡単に死なせると思う？」

女の言葉に冬夜は絶望する。これから死ぬまでに、どれほど退屈な時間を過ごさなければならぬのだろうか、と考えると、ぞつとした。

「……の割には矛盾した行動だな、撃つたところをわざわざ蹴るなんて」

サデYSTか、と冬夜が尋ねると、再び蹴られた。この女、容赦ない。

「お前には裁きを受けてもらおう」

「法廷で？」

そうだ、と女は答えた。それに「冗談じゃない」と冬夜は返す。

「もう自分でも分からないほど人を殺してきたんだ。死刑以外に無いだろう。どっちにしても死ぬんだったら、ここで死んでも同じだ

る？」

むしろ、冬夜が捕まった、なんてニュースが流れたら、遺族がすぐに殺せ、と泣き叫び、怒り狂うのではないだろうか。それなら犯人死亡で、さっさと事を済ませたほうが良いような気もした。人の死は物事を沈静化させる際、絶大な効果を発揮するからだ。

そんなことを考えながら、冬夜は顔を上げた。影になって女の表情は読めなかった。ただ、僅かな光を反射する両眼に、冷たいものを感じた。

「死刑とは限らない」

「無期懲でも結果は一緒だぜ？」

暇で憤死する、と冬夜は笑いながら告げる。そして予想通り、冬夜は再び腹部を蹴られた。

「贖罪を暇と言うか」

「お前さんが言うに、俺はゲスだからな」

大体、罪って何だよ、と冬夜はむせながら呟く。

「昔のお偉い方々が作ったルールを破ってはいけません、なんて馬鹿馬鹿しいと思わないか？」

「それでも人を殺してはいけない」

当たり前で模範のような答えが返ってきた。これも冬夜の予想通りだった。分かっちゃいないな、と苦い笑みを零す。しかし、蹴りは飛んでこなかった。

「別に人を殺してはいけません、とは誰も言えないだろう。元々、生物つてのは争うもんだ。殺し合うのが当然だ。それを不自然に捻じ曲げるために、人がルールを築き上げたんだ」

土台を捻じ曲げた上にできた世界なんて壊れるべきだ、と冬夜は言う。それに対する反応は無かった。ただ女の瞳に宿る光が、どこか悲しみの色を帯びたように見えた。

「あなたの常識を疑うわ」

「知ってるか？ 常識ってのは、おおよそ成人までに身につけた独断と偏見のことを言うんだぜ」

どこかの天才が言っていた、と告げることはなかった。まるで自分が生み出した言葉のように堂々と言った。実際、常識とはそんなものだ。育った環境に大きく左右される。そして育つ環境は、人の数だけある。同じ家庭に生まれた兄弟でも、そこには兄と弟、そして生まれた時代背景が絡んでくるため、完全に同じ常識になるとは限らない。それは成長するに従って、より大きく変わっていく。結果、生まれる常識は、その人にとっての物でしかないのだ。本当に全世界共通の　それこそ、どこでも常に通る知識なんてあるかどうか怪しいものだ、と冬夜は推測している。

「それでも人を殺してはいけない」

女は模範解答を再び告げた。もはや、話しても無駄であることを悟り、冬夜は大げさにため息をついてみせる。それは呆れだけではない。本当に問答が疲れてきたのもあった。

ふと視線を落とすと、血の海が冬夜の腰を中心にじんわりと広がってゆく。それを見つめていると、不意に意識が遠のいた。がくり、と頭が落ちる。その反動で何とか意識を取り戻すも、抗いがたい眠気が再び冬夜を襲う。それと同時に悪寒が背筋を抜けて、体が震えた。悪寒と眠気が競り合う。簡単に眠気が勝った。こんな状態でも眠れるんだな、と冬夜は静かになっただけでゆく思考の中で呟いた。

その直後、眠ると言うより、意識を失いかけているのだと冬夜はすぐに気づいた。死が近い。今、自分の後ろに死神さんがスタンバイしていると言われれば、即座に信じただろう。そして、さっさと殺せ、と死神に願っただろう。

「救急車は手配しているんだから、死んだら許さない」

身体が前後に揺れる。しかし、その感覚も遠のいていった。恐らく女が自分の体を揺らしているのだろう。それでも、この眠気には抗えない。瞼が落ち、世界が闇に包まれる。そして音も消えていった。

冬夜はしんと静まった闇の中、心地よさを覚えていた。逃亡生活中、一度でもここまで落ち着けたことがあっただろうか。無かった

とは言わない。実際、いつ死んでも仕方ないと考えていた冬夜の逃亡生活に、緊張感は無縁だった。のらりくらりと人を殺しながら、生きながらえていた。それでも、もう逃げる必要がないどころか、何もする必要もない状況は久しぶりだった。やっと休める、とほっとした。

いつしか、それらも消える。闇すらも。意識が完全に途切れたのだ。そして脈拍が止まる。こうして殺人鬼、南雲 冬夜はようやく止まることができた。

うるすということ（前書き）

先に一言。この話の序盤で殺人について、もろもろ書いていますが、私自身が殺人を肯定しているわけではありません。むしろ、自棄になったとしても、私は誰にも迷惑かけずに、ひっそりと死にたい。何もできない人は、何もせずに世界から退場すればいいのです。あ、私事です。

うるすといふこと

人を殺してはいけない　そんなルールが当然のように敷かれて
いる世界だが、実際はそうなのだろうか。

人を殺してはいけない理由として、他人にやられて不愉快なこと
はしないように、と教える両親や教師がいる。ならば、殺されても
構わないのなら、人を殺してもいいのだろうか、とすることになる。
それは自暴自棄になって、無差別に殺人を繰り返すことを認めて
しまうことになる。

また別の理由として、誰かが悲しむから、と云う人もいるが、そ
れも先ほど述べた理由と似たところがある。あなたが誰かを殺す。
すると、その誰かを知っている人が悲しむ。つまり、あなたの周り
の大切な人が殺された時を想像しなさい。不愉快でしょう？　と尋
ねているようなものだ。ただ、この場合も不愉快じゃないし、自分
の周りに失って困るような人はいません、となると相手は絶句する
のだろう。

最後に法律で罰せられるから、と云う人もいる。ただ、それは人
を殺してはいけない理由になっていないことを彼らは理解していな
い。別に人を殺してもいいですよ。ただ、殺した際はそれ相応のペ
ナルティを負ってもらいますからね、と云うのが法律なのだ。もち
ろん、その刑罰を明確にすることで、抑止力に繋がる。しかし、そ
れは人を殺してはいけない理由にはならない。法律によって守られ
ることを望まなければ、それを守る理由など無いのだ。

守りたい者だけ、守っていればいい　冬夜はそう考えていた。
だから、身勝手なのは重々承知で、人を殺し続けた。ただ、殺され
てもいいと考える者が、生きるために人を殺すと言うのも、これま
た矛盾しているように思えた。しかし、飢餓や寝不足で苦しむのは
本望ではない、と簡単に考えて、次々と人を襲った。

そんな冬夜は止まった。ようやく止まれた、と満足感の中、死ん

でいった　はずだった。

「何だ、これは」と冬夜は思わず呟いた。仰向けになって、しかもふかふかで温かいベッドに横になっている。どうしてこんなことになっているのか、理解できなかった。

冬夜は白い天井を見つめながら、必死に記憶を辿る。逃げている最中に撃たれて、そして意識を失って……病院？　そろりと冬夜は首を横に振った。しかし、どう見ても、病室ではない。机とタンスがあるだけの簡素な部屋だった。テレビは無い。ただ、机の上に大きなパソコンが一台置いてあった。床には無造作に服が散らばっている。

どこことなく見覚えのある風景に、冬夜は眉をひそめる。掛け布団をめくり、恐る恐る身を起こす。そこで違和感に気づく。むしろ、違和感が無いことに違和感を抱いた、と言うべきだろうか。撃たれたはずの腹部に痛覚や違和感が無かったのだ。

まずは周囲を確認する。人の気配が少しだけするが、その音は遠い。更に部屋の隅まで観察してから、一息吐く。監視カメラも無い。一体何を考えているんだ、と呆れながらも、冬夜は服をまくった。撃たれたはずの腹部に傷は無かった。

そこで再び思考する。撃たれた傷が治ってしまうほど、長く眠っていたのだろうか。しかし、冬夜はそれを即座に否定する。そんな長い時間を眠って過ごしていたら、今こうして身を起こすのも大変だったに違いない。

何かが変わだ、と訝りながら、ベッドを抜け出る。足元に散らばる服を踏まないように気をつけながら、部屋を出る唯一の扉へと忍び寄った。そつと扉の取っ手に手を伸ばす。何か仕掛けがあるような重みは無いし、鍵もかかかっていない。冬夜はそつと扉を開け、その隙間から外の様子を伺う。先ほど聞き取れた音が僅かに大きくなったように感じた。

どこかの一軒家の廊下のようなようだった。フローリングがすつと奥に続いて、その先に階段がある。階段が螺旋状になっているのか、下

のフロアまでは見通せない。ただ、ここが二階以上であることだけは確かだった。

それと同時に僅かな隙間から流れ込んでくる香りは、どこことなく懐かしさを覚えた。しかし、それを振り払うように、冬夜は扉をそつと閉めた。人の気配がする以上、先に進むのは危険だと判断したのだ。何故こんな状態になっているのか分からないが、傷も塞がり、体調はほぼ完璧に近い状態なのだから逃げることも可能かもしれない、と冬夜は考え始めた。足音を消したまま、部屋の中央に立つ。そして二つの選択肢を見やって、冬夜は考える。

冬夜の視線の先には窓が二つあった。どちらも普通の窓のようで、薄いカーテンが陽光を程よく遮っていた。直接触れるのは気が引けたが、この部屋にある物を利用して結果は似たようなところだ。何かしら痕跡が残る、と考えた所で、冬夜はふつと息を吐いた。痕跡も何も、先ほどまで自分はあるベッドで寝ていたではないか、と苦い笑みを零し、そこから冬夜の行動は大胆になった。

机の上にあったシャープペンを手にとり、カーテンを開いた。ここには普通の窓があった。これなら、すぐに逃げ出せるかもしれない、と思えるぐらいに普通だった。しかし、冬夜は硬直する。まるで、そこに罠があるのを発見したかのような、驚愕の表情で窓を見つめていた。否、正確に言うならば、窓の外に広がる風景だろうか。しばらく、それを見つめた後、何かに気づいたように冬夜は部屋を振り返った。

まさか、と小さく呟く。ここは。
「俺の、部屋？」

何年も昔に逃げ出した場所に、冬夜は立っていた。何の冗談だと笑い飛ばさそうと思っても、頬は自然と引きつる。あの女が、ここに自分を運んだのだろうか。それこそ余計なお世話だ、と内から熱が湧き上がった。

殺してやる、と明確な殺意を持ったのは久しぶりだ。今までは成り行きで面倒くさくなり、結果的に殺すことが多かった。殺すこと

が目的なのではない。別の目的があり、それに向けて行動を起こしている内に殺すと言う結果に辿り着くケースが多かっただけなのだ。そのため、久しく湧いた感情のコントロールに手間取る。むしろ、コントロールする気も失せた。冬夜は乱雑に扉を開けて、廊下に出た。

それと、ほぼ同時に廊下にあつた一つの扉が開いた。そして顔を覗かせた少女が目を丸くして、冬夜を見つめる。そして冬夜も硬直した。

「ど、どうしたの、兄ちゃん」

尋ねられていることは理解している。しかし、今の冬夜に答える余裕は無かった。溢れ出しそうなほど疑問符が浮かび続け、頭の中が詰まりパンクしそうだった。情報過多だった。その一言と彼女に出会ったことで、大体のことは把握できたものの、何故そうなっているのかが分からなかった。むしろ、こんな状態になるはずがないのだ。

「もしかして、気分良くなった？」

驚きの色が薄くなり、少女の瞳に期待の光が宿る。しかし、それにも答えられない。やがて、少女は失望したかのように肩を落とす。 「もういいよ」と小さく不貞腐れたように零すと、冬夜に背を向けて階段を下りて行った。

冬夜は一人廊下で立ち尽くす。ようやく疑問符が少しずつ消えてゆき、思考の余裕が生まれた。そして結論は驚くほど、あつと言う間に導き出される。

「走馬灯、か」

後頭部を掻きながら、ため息をつく。そして冬夜は階段を下りていった。走馬灯なら遠慮なく立ち振る舞おう。もはや、足音に気を遣う必要も無い、と冬夜はリビングに向かった。懐かしいな、と冬夜は玄関などを一瞥し、思わずため息を漏らす。それが安堵と呆れが混じったような息だった。

そしてリビングへと続く扉を開く。その瞬間、時が止まったよう

に感じた。母も父も妹も、皆自分を見て、固まったのだ。テレビから流れるニュースと、フライパンに熱された何かが鳴いている。それ以外の音は無かった。

おはようと、母がぎこちなく言う。それにさらりと答えながら、冬夜は食器棚を開いた。

「朝ごはん、すぐに準備するから」

冬夜はコップを取り出して、食器棚を閉めた。

「いいよ、別に」と冬夜は断る。何か言いたそうな母の横を通り過ぎて、キッチンに入った。そして蛇口を捻って、コップに水を注ぐ。それを一気に飲み干してから、冬夜は再び口を開いた。

「朝は食べられる気がしない」

そして、もう一杯水を飲み干して、コップを置いた。

「じゃあ、お昼、お弁当は？」

弁当？ と冬夜は思わず聞き返した。その際に制服姿の妹の姿が視界に入り、納得する。まだ自分が学生だった頃の走馬灯なのか、と。それにしても今はいつなのだろうか、と冬夜は内心で首を傾げながら、とりあえず弁当の申し出を断った。「そう」と母は悲しそうに目を伏せた。何も言わなかった父と妹も、どことなく暗い表情で黙々と朝食を口に運んでいた。それにしても良い匂いだな、と母の手にあるフライパンに目をやると、ウィンナーが焼け、ぱちぱちと鳴きながら跳ねていた。

「それ、一つだけ貰っていい？」

そう言って、冬夜はフライパンに手を伸ばした。許可を得る前にフライパンに乗ったウィンナーを手にし、口に運んだ。予想以上に熱かったが、噛み潰すと肉汁が口内に広がった。それがまた熱く、苦労しながら飲み込んだ。喉元過ぎれば熱さを忘れる、ってのはウソだ。胃の中に広がる熱は気味が悪く、冬夜を苛んだ。

そして母に背を向けて、リビングを後にしようとする。さて、どうしてくれようか、この走馬灯、と考えながら、扉に手を伸ばした所で、「冬夜」と呼び止められた。低く、重圧な声だった。それに

答えることなく、冬夜は振り返った。父が渋い顔で口を開く。

「高校ぐらいは出ておけよ」

「出て、何か得するなら」

冬夜は悪気もなく、率直に返した。そして何か言いたげに口を動かす父に背を向けた。待て、と声が聞こえる。しかし、冬夜は無視した。そのまま階段を上り、自室に戻った。そしてベッドに再び横たわった。まだ肌寒く、掛け布団の中に身を滑り込ませる。

「……案外、暇だな」

白い天井を見つめたまま、冬夜は呟いた。やがて、ばたばたと廊下を走る音が僅かに聞こえてくる。そして「いつてきます」と妹の夕夏ゆづかが玄関を出ていった。

部屋を区切る扉と違い、玄関の重厚な扉を開け閉めすると、家全体に音が響く。どこに行くにも誰かに知られてしまうのを嫌い、冬夜はいつしか玄関の扉を音無く開け閉めすることが得意になってしまった。それが後々の逃亡生活でも役に立ったのだから、人生で何が役に立つかなんて分からないものだ、と今更思い耽った。

それにしても退屈だ、と冬夜は思う。あの頃の自分は一体何をしていただろうか、と思いつくとしても、その後刻んだ記憶が斬新すぎて、記憶が霞んでいた。とは言え、パソコンに向かっていたような気がするな、と冬夜は布団から抜け出て、パソコンを起動した。

「……遅え」

電源ボタンを押し、パスワードを打ち込む画面まで、しばらく待つ。そしてパスワードを打ち込んでから、更に待つてようやくデスクトップの画面が表示された。一体どんなオペレーションシステムを使っているんだ、と考えて思いつく。窓社の二〇〇〇だ。

ようやく起動したブラウザのお気に入りを見る。ああ、そういうえば、と冬夜は思いつく。ウェブ漫画や小説のリンク、またはオンラインゲームのホームページなどが整理されずに並んでいた。漫画でも読み直そうか、とリンクをクリックする。しかし、ブラウザの動き

は酷く遅い。三ページほど進んだところで、次のページを長々と読み込んでいるパソコンを強制終了した。

再び暇になった、と冬夜はベッドに転がった。時計を見ると八時半になり、そろそろ学校も始まる頃だった。今から行ったところで遅刻は決定なのだが、如何せん、この暇が酷い。散らばった服を漁ってみると、随分と下のほうに制服が埋もれていた。いつから学校に行っていないのだろうか、と思い、月日を確認するために部屋を出た。

リビングには母しかいなかった。父はもう仕事に出たのだろう。

「どうしたの？」

テレビを見ていた母は冬夜の姿を見ると、柔らかく微笑みながら言った。しかし、その瞳の光が僅かに揺らいでいるのを冬夜は見逃さなかった。

「いや、暇だなんて」

学校でも行こうかな、と零すと、やはりと言つべきか、母の表情は一気に明るくなった。

「でも、お昼はどうするの？」

「購買で何とかする」

「お金あるの？」

そこで冬夜は首を傾げる。我ながら間抜けだったと思いなながらも確認しなければ分らない。と言うか、走馬灯なのにお腹が空くのだろうか、と考えるとおかしくなって、つい笑みが漏れた。ある、と答えて、冬夜はリビングを後にする。

家を出て、途中でコンビニに寄ろう。そこで週間雑誌などでも立ち読みして、今がいつなのかを調べるつもりだった。なかなか自由度の高い走馬灯に満足しながら、冬夜は着替えた。再び制服に身を包むことがあるうとは、込み上げる恥ずかしさを一瞬で噛み殺して、冬夜は家を出た。そして自転車に跨り、ペダルを踏んだ。

まだ学校に通っていた頃、よくお世話になったコンビニで自転車を降りた。当時、帰宅の途中に寄っていたので、登校中に入ったこ

とはなかった。女性店員の訝るような視線に対し、冬夜は軽く睨み返す。いらつしゃいませ、と店員は目を逸らしながら言った。

そして本棚に向かつて、雑誌を手に取り、開く。その記されている日付を見ても、ぱつと思い出せないために逆算するハメになった。結果、今が高校二年の春であることが分かった。自分が学校に行かなくなり始めた頃だ、と冬夜は思い出す。これだけは忘れもない。何を隠そう、自らが殺人に走るきっかけが、この年に生まれるのだから。冬夜からすれば記念の年と言っても過言ではなかった。そうか、この年に俺は人を初めて殺したんだな、と考えると、感慨深いものがあつた。

雑誌を一通り読み終わると、それを元の場所に戻す。そして店員の冷たい視線を背中に感じながら、冬夜はコンビニを後にした。長居は良くない。学生服で、こんな時間にコンビニにいたら、宿敵の警官に補導されてもおかしくないからだ。たとえ走馬灯であっても、警官のお世話になるのは気が進まない。長い逃亡生活のせいで、警官は敵だという意識が抜けなくなっていた。

自転車に跨り、学校に向かつて、のんびりと漕ぐ。既に遅れているのだから、急ぐ必要も感じられなかった。懐かしい風景に目を細め、冬夜は故郷の空気を吸い込んだ。まだ冬の残滓を感じさせる空気の冷たさと車が吐き出す排ガスの臭いで、少しむせた。幹線道路を車が颯爽と抜けてゆく。渋滞のピークは過ぎたようだった。

冬夜は腕時計に目をやった。時計は既に九時を回っている。仕事でも学校でも始業の時間だろう。ならば、ここを走っている車は一体何をしているのだろうか、と少し首を傾げながらも、一瞬でその疑問を忘れた。

やがて、学校に着く。誰一人、制服姿を見ない通学路と言うのも、これまた不思議なものだった。自分だけ妙に目立っているのではないか、と冬夜は気が気でなかった。これも逃亡生活の癖なのか、あまりに目立つ行為は避けたかったのだ。そのため、校門を通り、自転車置き場までやってきて、冬夜は安堵の息を漏らした。

自転車を適当に止めると、下駄箱へと向かった。ふと桜のような澄んだ香りが鼻をつく。冬夜は足を止めて振り返った。自転車置き場の奥にある桜が風に揺られ、花びらが雪のようにはらはらと舞い降りた。満開は過ぎているのは、桜に詳しくない冬夜にでも分かった。もう四月も後半に入っているのだから当然だ。雨が降れば、一瞬にして花びらが落ちるだろう。冬夜は興味なさそうに背を向けた。下駄箱を訪れると、やはり二年生の所に冬夜の上履きがあった。

それと履き替えて、廊下を歩く。どこからか授業を進める教師の声が聞こえてくる。それ以外は音が無く、静かだった。階段を上り、教室を目指す。記憶が正しければ、ここのはずだ。冬夜はクラスの番号を確認して、扉を開いた。刹那、空気が止まる。視線が自分の下に集まるのを感じながらも、冬夜は素知らぬフリで教室に踏み込んだ。俺の姿を見たら、一度は誰もが固まる。それに何とも言えない居心地の悪さを覚えて、やはり居場所なんて無かったんだな、と冬夜は小さく息を吐いた。

当時、自分の席がどこだったかまで覚えていない。教室中を見渡して空いている席を探すと、二つあった。どちらだろうか、と冬夜は悩む。確かあちらの席だったと、あやふやな記憶に従って足を進めた。

「おい、南雲」

呼び止められて、振り返る。教師が手を差し出していた。

「遅刻届けは？」

教師の目は笑っていないかった。厳しい目つきで、冬夜を見ている。「それに遅れてきたら、言うこともあるだろう？」

最初からやり直して来い、と教師は言った。急に白けた。冬夜はそんな教師から視線を逸らして、大きくため息をついた。その態度が気に食わなかったのか、教師の眉間に皺が寄る。「何だ、その態度は」と今にも言い出しそうな雰囲気に、冬夜は微笑む。

走馬灯だ、自由なのだ。肩に掛けていた鞆を、するりと落とす。身が軽くなった。そして床を三度蹴り、教師との距離をゼロにする。

教卓にあつたボールペンを掴み、教師の首筋に向けて振るつた。それを綺麗に寸前で止める。出ていない芯をかちりと押し出すと、ペン先が喉に触れて、黒い点をつけた。

それだけで充分だつた。教師は一步も動けず、状況を把握してから、ようやく腰が抜けたように教卓の影に崩れ落ちた。そして手にしたペンを教卓にそつと置く。冬夜は何も言わずに振り返つた。クラスメイトの視線に一瞬気圧されながらも、自らの鞆を取るために足を踏み出した。

結局、何をしにきたのだろうか、と冬夜は考えながらも、鞆を拾い上げて教室を後にする。それと同時に授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

廊下に出ると、先ほどとは違って、音が溢れていた。椅子を引く音があちらこちらの教室から響き、やがて声が漏れてくる。誰もいなかった廊下に人が出てくる。授業を終えた教師や、馬鹿はしゃぎした男子生徒などを無表情で抜き去りながら、冬夜は下駄箱へと向かった。

「冬夜？」

そんな冬夜を呼び止める者がいた。これが嫌だつたのだ。冬夜は小さく舌打ちを漏らしながら、振り返つた。久しぶりだな、と笑いながら言う男が視界に入った瞬間、冬夜は全身の毛が逆立ちそうになるほどの感情が爆発的に生まれた。冬夜が明確な殺意を抱くのは珍しい。しかし、今日だけで二度も殺意を抱いたら、説得力も無さそうだが、それは事実だつた。

目の前が真っ赤になる。八つ裂きにしたい衝動に駆られるも、今は武器が無い。筆箱の中にコンパスや定規などがあるが、それらを取り出す時間が惜しかった。今すぐに目の前の男を殺してやりたいと握りこんだ手に力が入り、骨が鳴つた。

しかし、瞬時にそれをコントロールする。走馬灯なのだから、別に構わないのではないかと考えながらも、周囲の目が気になり、今はすべきではない、と判断したのだ。それは、もはやクセだつた。

衝動を飲み込む際に、少し顔を伏せる。そして次の瞬間、冬夜が顔を上げると無表情になっていた。そして目の前の男、上村 祐介を興味なさそうに見つめていた。

「何か？」

「おいおい、用が無かったら、話しちゃいけないのかよ？」

少し驚きながらも、上村は苦い笑みで答えた。

「学校、来る気になったんだな？」

「気まぐれでな」

飲み込んだ衝動は、喉元を過ぎて落ち着いた。熱い物を飲み込んだ時とは違うのだな、と小さく呟いた。

「ん、どうかした？」

何でもない、と返して、冬夜は上村の横を通り過ぎる。

「お、おい、荷物持って、どこ行くんだよ？」

案の定、上村は慌てて冬夜についてくる。あまりにも予想通りすぎて、冬夜は思わず苦笑を漏らした。こういうヤツなのだ。人の気も知らないで、ずけずけと踏み込んでくる。そして人の居場所を奪っていった。一瞬、吐き気を覚えるも、それは現実のものではなかった。飲み下した衝動が再び喉元をせり上がってくるかのような感覚だった。

衝動を再び飲み下して、冬夜は「帰る」と返す。すると「何で？」と尋ねられた。

「それを知って、どうする？」

お前には関係ない、と冬夜は突き放した。しかし、上村はなかなか離れない。じりじりと衝動が喉の壁を上ってくる。

「理由を知らば、何とかできるかもしれないだろ？」

余計なお世話だ、と冬夜は鼻で笑ってみせる。

「お前が原因だよ、言うまでもないだろうが」

その瞬間、上村は目を剥いた。そして悲しそうに目を伏せながらも、足を止めない。未だ、冬夜の横に並んでいた。

「やっぱり、怒ってるのか？」

「そんな気がする」

冬夜の返答が曖昧になったのは、確信が持てなかったからだ。もう遠い昔の記憶だ。今、覚えているのは圧倒的な殺意だけで、それが生まれた原因となる感情を思い出せなかった。ただ、その感情を生み出した原因なら、冬夜は覚えていた。

「別に気にすることはねえよ。お前は良いヤツだ、夕夏と付き合えばいいさ」

どこかで言ったことのあるセリフを思い出して、冬夜はそれを棒読みした。しかし、もはや感情は湧いてこない。二人が付き合いだした当時、自分はどんな気持ちで、その言葉を吐いたのだろうか。冬夜は、それを思い出すことができなかった。

「だからさ、もう帰ってもいいか？」

「いや、そんな当然のように帰るって……良くねえと思うんだが」それに、と上村は続ける。

「部活、どうするんだ？ 先生、もう怒りも呆れも通り越して、心配してるぜ？」

そう言えば、と冬夜は思い出す。学校に顔を出すことがなくなり、それと同時に部活も行かなくなった。結果的に、それは冬夜が初めて人を殺すまで続き、学校も部活も自然と戻れなくなった。

つまり、この頃はまだ周囲が冬夜のことを諦める前だったのだろう。面倒くさいと思いつつも、現状に不思議な心地を覚えていた。走馬灯に出てくる人に心配されてるって、どういうことだ、と。

「辞めるなら辞めるって伝えにいけ、ってことか？」

どうせ結果的に辞めるのだから、と冬夜は肩を竦めながら答えた。すると、上村は大げさに首を横に振った。

「違う、何でそうなるんだよ。今まで、ずっと一緒にやってきたのに」

上村の声は怒気をはらんでいた。しかし、怒られる筋合いは無い、と冬夜は更に突き放す。

「俺の自由だろうが」

「自由だけど、勿体無い。それに辞める理由は？」

飽きた、と返すと、上村は一瞬口を開いたまま、固まった。やがて頬が引きつり、眉が釣りあがる。来る、と冬夜は体を反った。目の前を上村の拳が抜けてゆく。少し目測を誤ったのか、上村の拳は鼻先をかすめていった。そのまま冬夜の身体は後ろに倒れてゆく。その体勢を利用して、冬夜は足を振り上げた。無防備な上村の首筋に、冬夜の爪先が綺麗に入る。そこで振り抜かず、当てた瞬間に足を引いた。綺麗なハイキックだった。ただ振り抜いていない分、ダメージは軽かったようだ。上村は廊下に膝をつき、咳き込みながらも冬夜を睨み上げていた。

「良かったな」

今、武器が 刃物があったら、確実に殺していたぞ、と冬夜は心の中で呟いた。

そして、これまた随分と目立ったものだ、と冬夜は眉をひそめる。休み時間だと言うのに、廊下はしんと静まり、視線は冬夜と上村に注がれていた。そこから逃げるように、冬夜は上村に背を向けて、下駄箱に向かって歩き出した。本来なら教師に呼び止められて、怒られるぐらいの出来事なのに、誰も冬夜を止めることができなかった。しばらく顔を出さなかった冬夜の変貌に、誰もが声をかけることを躊躇ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945o/>

殺人鬼の日常。

2011年12月2日21時52分発行